

Title	馮氏一家之学
Sub Title	The learning tradition of the Féng family
Author	今原, 和正(Imahara, Kazumasa)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1980
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.39, (1980. 2) ,p.100- 120
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00390001-0100

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

馮氏一家之学

今 原 和 正

明末清初の巨公、錢謙益（一五八二—一六六四）は、政界においては東林党の領袖として、文壇においては虞山詩派の眉目として、十七世紀前半の中国文明の中に大きな地位を占めていた。また、学問の領域においても、後の清朝考証学を先取する部分を持っていた。^① こうした巨人の周囲には、さまざまの人があつまって、それぞれの分野で相互の影響関係をもつようになってくる。本稿では、錢謙益の周囲にあつまった人々のうち、馮舒・馮班の兄弟を中心とした馮氏一家の学問について述べてみたいと思う。

一

馮舒・馮班の父、馮復京^②、字は嗣宗（一五七三—一六二二）については、錢謙益に「馮嗣宗墓誌銘」（初学集卷五十五）がある。いまその中から、彼の学業に関する部分を引用してみよう。

「君は強学広記にして、章句の小儒たることを屑^{いさぎよ}しとせず。少くして詩を業とし、箋疏に鈎貫して、宋人を嗤いて固陋と為し、六家詩名物疏六十卷を著す。冠婚葬祭、当に家礼をば会典に抗せしむべからずと謂い、遵制家礼四卷を作る。旧聞を羅ね、先徳を述べて、先賢事略十卷族譜四卷を作る。年四十余にして始めて本朝実録を見、通紀は詳にして野、

吾学は裁にして疎、弁山は博を炫いて妄にして繆、憲章・典則是鄙よりにして譏るまでもなし、と謂いて、編年の書を作り、得失を駁正して明右史略と曰う。草創未だ就らずして歿す。」

これだけの資料をもとに馮復京の学問について多く論ずることは避けねばならないが、「宋人を嗤って」いたことは注意しておいてよいであろう。吉川幸次郎博士はこの記述に対して、錢謙益が、友人のうちで「古学」を修めた者を、その伝記でそのことを特筆している、そのひとつの例である、という見解を示しておられる。⁽⁴⁾ 宋儒への反発、漢儒への接近、ということが、馮復京において已に見えるのである。

復京の長子は、舒、字は已蒼、号は黙菴。別号は癸巳老人、屢守居士。万曆二十一年（一五九三）に生まれ、⁽⁵⁾ 順治六年（一六四九）に知鼎瞿四達の怨みを得て獄に死んだ。著作に黙菴遺稿十卷、懷旧集二卷、詩紀匡繆一卷、虞山妖乱志二卷増後一卷がある。その学業がどのようなものであったか、やはり錢謙益の「馮已蒼詩序」（初学集卷四十）を引用してみよう。

「吾が党の馮生已蒼は、早に举子の業を謝し、経に枕し史に藉し、志を千古に肆にす。其の学を為すや尤も詩を専にし、其の詩を治むるや尤も遺佚を搜討し、譌繆を編削するに長ず。一言の錯互、一字の異同は、必ず進んで其の遯隠せるを抉り、其の根核を弁す。其の朽編断簡、粉披狼藉、魯魚の点定せられ、青丹の勾抹せらるるに当っては、夢夢然として視るが若きなり。倂佞然として求めて得ざること有るが若きなり。已にして滞るかと思ふ。通膠千積、忽然として睡り、煥然として興く。寇を逐う者の首虜を得たるが若きなり。盜を案する者の贓証を獲たるが若きなり。蓋し本朝の詩を論ずるは、推すところ肉譜を専門とすること、楊用修に如くはなし。已蒼独り能く其の躋駁を扶擿して曰く、此れ偽撰なり、と。曰く、此れ仮託なり、と。鑿鑿乎として援据するところあり。而うして其の以って然る所を疏通証明す。用修

復た起ると雖も、自ら解免する能わざるなり。近世の詩婦の若きは、別字を錯解し、一一正きを挙げ、賓筵客座、弁論鋒起するも、古を援き今を証し、尾を矯め角を厲て、自ら以って馮氏一家の学と為す。論ずる者以って難ずるなきなり。」詩集における詩編の遺漏や誤入、詩篇における詩句の錯互や文字の異同、それらを幅広い学識と厳格な姿勢とでひとつひとつ訂正してゆく校勘という作業、それが馮舒の最も得意とするところであった。

次に、校勘とともに馮舒が精力を傾けたものとして、書物の鈔録がある。葉德輝の「書林清話・卷十・明以来之鈔本」の記載を引用してみよう。

「明以来の鈔本書の最も蔵書家の秘宝とするところとなる者……馮鈔と曰うは、常熟の馮已蒼舒、馮定遠班。馮彦淵知十兄弟一家の鈔本なり……其の平日、鈔書を以って課程と為す。故に今に至るまで流伝して絶えず。尤も貴ぶべきは、馮已蒼舒。甲乙鼎革の交に当りて、荒村の老屋に遁迹す。酷暑蒸すが如く、而も手鈔輟まず。……古人拳拳として書を愛するの心、直ちに性命と軽重を為す。吾れ国変に遭ってより、難を四方に逃れ、頗る鈔書の暇あるも……几席は塵封ず。……以って屏守老人を視るに、滋ますます媿はずること甚し。」

葉德輝は、馮舒が明清鼎革の際の困難な状況のもとでも鈔録の手をやめずに貴重な書物を伝えてくれたことに對して、自分の体験と比較して、大きな敬意を表しているのである。鈔録家としての馮舒に対する正当な評価と見做してよいであろう。

校勘と鈔録における彼の業績は次の通りである。

(一)、校 勘

1、十六国春秋略十六卷（鉄琴銅劍楼蔵書目録、稽瑞楼書目）

- 2、水經注四十卷 崇禎十五年（儀顧堂統跋）
- 3、封氏見聞記十卷（台灣公藏善本書目人名索引）
- 4、穆天子佖六卷（稽瑞樓書目）
- 5、世說新語三卷（稽瑞樓書目）
- 6、芸文類聚一百卷（鉄琴銅劍樓藏書目錄）
- 7、江文通集八卷 順治五年（鉄琴銅琴樓藏書目錄、稽瑞樓書目、讀書敏求記考証、台灣公藏善本書目人名索引）
- 8、呂和叔文集十卷 崇禎四年（楹書隅録統編、善本書室藏書志、陌宋樓藏書志、讀書敏求記考証）
- 9、王建詩集十卷（台灣公藏善本書目人名索引）
- 10、白氏長慶集二十一卷（芸風藏書記統記）
- 11、梨山詩集一卷（稽瑞樓書目）
- 12、徐常侍集三十卷（陌宋樓藏書志）
- 13、嘉祐新集十六卷 順治二年（鉄琴銅劍樓藏書目錄）⁽⁶⁾
- 14、御覽詩一卷（稽瑞樓書目）
- 65、中興間氣集二卷 崇禎十二年（蕘圃藏書題識、芸風藏書記、文祿堂訪書記）
- 16、才調集十卷 崇禎八年（二馮先生評閱才調集跋）
- 17、搜玉小集一卷 崇禎三年（芸風藏書記、文祿堂訪書記）

(二)、鈔 錄

- 1、汗簡三卷略叙一卷 崇禎十四年（儀顧堂統跋、鉄琴銅劍楼蔵書目録）
 - 2、復古編二卷 崇禎四年（鉄琴銅劍楼蔵書目録、稽瑞楼書目）
 - 3、近事会元五卷 順治二年（鉄琴銅劍楼蔵書目録）
 - 4、封氏見聞記十卷（読書敏求記）
 - 5、沈下賢文集十二卷（鉄琴銅劍楼蔵書目録）
 - 6、元英先生詩集十卷 崇禎元年（菟園蔵書題識、楹書隅録統編）
 - 7、文心雕菴十卷（鉄琴銅劍楼蔵書目録）
- 復京の次子は、班、字は定遠、号は鈍吟居士。万曆三十年（一六〇二）に生まれ、康熙十年（一六七二）に歿した。馮班についても、やはり錢謙益に「馮定遠詩序」（初学集卷二十二）がある。馮班の詩風と人柄についての記述が主で、その学業については触れていない。「詩序」であるから当然の処置と言えるかも知れないが、馮舒のための「馮已蒼詩序」が、その学業について多くの文字を費やしていることを思いあわせると、馮舒はより学に長じ、馮班はより詩に長じているという認識が、錢謙益にあったのかも知れない。事実、その業績を比較すれば、馮班のそれは、量も少く、対象も、自分の詩に関係するものに範囲が限られている。
- 校勘と鈔録における馮班の業績は次の通りである。
- (一)、校 勘
- 1、玉台新詠十卷 順治六年（読書敏求記考証、寒瘦山房灣存善本書目、台湾公蔵善本書目人名索引）
 - 2、才調集十卷 崇禎十一年（馮先生評閱才調集跋）

3、楽府詩集一百卷 崇禎十二年以前（寒瘦山房鬻存善本書目）

4、呂和叔文集十卷（台湾公藏善本書目人名索引）

(二) 鈔 録

1、許丁卯集二卷統集二卷（適園藏書志）

2、西崑酬唱集二卷（鉄琴銅劍棧藏書目錄、読書敏求記考証）

しかし、その研究態度は、馮舒同様、嚴密なものであったろう。後に馮班に傾倒して「私淑の弟子」と称した趙執信は、その「鈍吟集序」（飴山文集卷二）の中で、

「先生は父兄の学を承け、其の博を窮め、其の精を致す。」

と述べている。馮班自身、「玉台新詠跋」の中で、

「宋刻本、紙繆甚だ多し。趙氏改むるところ、得失参半す。姑く之を存して、敢て妄断せず。」

と、自らの慎重な校勘態度を示している。また、馮班の友人、陸貽典は、その「楽府詩集跋」で次のように述べている。

「馮氏校するところ、即ち未だ詳なること能わず。而うして確として拠るべきことあり。」

自らも校勘の筆を取り、その困難さを知る者の発言である。馮班の校勘に対する正当な評価と見做してよいであろう。復京の季子は、知十、字は彦淵。生歿年は明らかでないが、蘇州府志卷九十九の記載によれば、「人と為り謀ありて義に勇」で、明末の困乱の中に戦死したと言う。学業については、已に引いた「書林清話」の中に鈔録家としての評価が与えられていたが、具体例としては、台湾公藏善本書目人名索引に、

支遁集二卷（手書題記） 明末蘇州馮氏鈔本

紹興內府古器評二卷（手跋） 明海虞馮氏鈔本

の記載を見出し得たのみである。馮氏の学問にとっては、知十よりも、その子、武、後に伯父馮班の養子となった人で、字は竇伯、号は簡縁（一六二七—？）のほうが重要であった。葉昌熾の「藏書紀事詩」の注に「海虞詩苑」を引用して、

「汲古閣に読書し、十余年を歴て、秘冊異本、窺覽するところ多し。」

とあるのを見ると、学者としての資質がこの人に受けつがれていたことがわかる。著作として、「書法正伝十卷」「遙擲稿十八卷」、「海虞科第世家考」があるほか、校勘の成果としては、

1、支遁集二卷（台湾公藏善本書目人名索引）

2、李善注文選六十卷〔卷二十八のみか？〕（読書敏求記考証）

がある。また、「藏書紀事詩」によれば、「塩鉄論」や「経眼録」の跋文を書いていたことがわかる。だが、より重要なことは、「鈍吟雜録」、「二馮先生評閲才調集」、「馮氏校定玉台新詠」など、ともすれば散佚しがちな先父の著作を整理刊行して、馮氏一家の学を世に伝えたということであろう。

なお、その他の馮氏一族については、馮班の子、行賢、字は補之、号は先谷、に「補菴詩集三卷」があり、その弟、行貞、字は復之、号は白菴に、「白菴余集一卷」があり、馮舒の孫、修、字は念修に、「東村集十二卷」があったことが、「稽瑞樓書目」によってわかる。このうち、行賢については、錢謙益がその詩人としての資質を認めて、「題馮子永日艸」（有学集卷四十六）の中で次のように述べている。

「余、定遠と父行を為す。親しく定遠の鬪角裏頭を見、以って班白に迫る。而うして今復た其の子の詩を能くすることの甚しきを見る。韓子の三世に感あるなり。」

学業としては、「芸風藏書記」によって、「寶氏聯珠集」の校勘をしたことがわかるが、その出来具合については、何焯が「頗る其の略を嫌う」と評している。学者としてよりは詩人としての才能を身につけた人であったのだらう。

馮氏は藏書家としても有名であったが、いま、諸書目より馮氏藏書として確認できたものを、参考として次に掲げる。

- 曹子建集十卷（鉄琴銅劍楼藏書目録） 毘陵集二十卷（蕘圃藏書題識、楹書隅録） 張司業詩集八卷（蕘圃藏書題識）
李文公集十八卷（適園藏書志） 歌詩編四卷（蕘圃藏書題識） 李長吉集四卷外集一卷（蕘圃藏書題識） 温庭筠詩集
七卷別集一卷（鉄琴銅劍楼藏書目録、読書敏求記考証） 李群玉方干詩集（蕘圃藏書題識） 重刊校正笠澤叢書四卷補
遺一卷（陌宋楼藏書志） 劉隋州詩集十一卷（芸風藏書記統記） 長江集（芸風藏書記）

以上、馮氏一家の学問について、彼等に近い人々の発言と、彼等の周辺の書物を保存する藏書家達の書目とによって、おおまかな素描を試みた。すなわち、馮氏の得意とするところは校勘と鈔録であり、その興味の対象は主として中晩唐の詩にあった、ということである。しかし、馮舒が「馮氏一家之学」と言って強調したかったのは、そうした形にあらわれたものであるより、それをもたらすアカデミズムではなかったかと思う。宋から明へと流れてきた恣意的な学問に対する反省が次第に強まる中で、馮氏においては、それはまず「古学」という形で馮復京に自覚され、ついで錢謙益によって保証されて、馮舒・馮班によって具体化されたものである。

では、その馮氏一家のアカデミズムがどのような言葉で語られているか、馮班の「鈍吟雜録」によって見てみたいと思う。

鈍吟雜録十卷は、馮班が生前書きのこしたものを、馮武が各所からあつめてきて整理刊行したものである。趙執信の「鈍吟集序」（飴山文集卷二）に、

「先生の長子行賢、嘗て携えて以つて都に入り、大いに時流に驚怪せらる。」

とあるので、後世への影響ということも考慮して、いま、この書物によって、馮氏の学問に対する姿勢と、その成果とを見ることにする。

馮班の学問に対する姿勢は、卷一「家戒上」、卷二「家戒下」、卷四「誦古浅説」によって伺うことができる。それは、幅広く慎重な学問を旨とし、読書の重視、經典の尊重、実践の強調、及びそれらをおこたつた宋人乃至は明末俗学の徒への反発を特色としている。

まず、幅広く慎重な学問を重んじた発言を引用してみよう。（鈍吟雜録中、特に「家戒」はしばしば口語を交えるため、引用する際も現代語訳に改めた。）

「中庸に『博く之を学び、審らかに之を問ひ、慎んで之を思い、明らかに之を弁える』と言うが、これが儒者の学問である。」（広文書局 筆記統編 鈍吟雜録P13、以下同）

次に、そのような学問をつちかうところの読書についての発言を、いくつか引用してみよう。

「読書にひとつの方法がある。意にかなわなるところがあると思つたら、しばらく放つて置くのだ。いつかまた合点のいくことがあるかも知れない。ただちにあれはだめだ、などと言つてはならない。」（P16）

「書物を開いて速読し、日に数十巻読み、老いぼれるまで怠らない。勤勉と言うべきだ。しかし無益だ。これには説がある。速読すれば、おやっと思っても調べてみない。一度読んだだけではその文章をおぼえられない。読書にいそしんでいけるものの、読んでないようなものだ。読書は量の多いことを求めてはいけけない。歳月がたてば書物も自然とふえてくる。経や史のような大著は、一遍読んだだけでは尽きないのだ。」(P 72)

「若い時は読書して多く記憶し、年を取って見識が進むと理解することが多い。温故知新とは見識が進むことによるのだ。」(P 72)

「儒者のつとめとして読書以上のものはないが、暗記してそれを博学だとするのは、読書の欠点で、読んでないのと同じことだ。」(P 16)

「読書は全集を読むべきであって、選集は読んでほならない。」(P 56)

「読書は古書を求めるべきだ。近頃刻された書物は、まず読むとはいけけない。」(P 71、同旨の発言がP 138にもある。)
經典の尊重ということについては次の記載を引用する。

「儒者が六経に対すること、法吏が法律に対することと同じで、一字もゆるがせにできない。法吏が罪を決定するには必ず法律により、儒者が事を論ずるには必ず六経にもとづく。儒者が六経を是非するようになってから、邪説が相い継いでおこって押さええようがなくなった。」(P 118)

学問の実践ということについては、次のような発言がある。

「およそ学問というものは実現実行されねばならない。空をつかむようなものであってはいけけない。」(P 36)
次に、これらのことが、宋儒あるいは俗学の徒に対する反発として発言されている例をみてみよう。

まず、読書をおこたったことについて。

「宋人は読書ということを学問とはしなかった。それゆえ、『顔淵、子産、管仲は学問をしなかった。』などと言う。これらの人々が、身を立て、己を行い、天下を均しくし、国家を治めたこと、すべて読書によってもたらされたことを知らないのだ。聖人は強く人に読書を教えている。子路が『なにも、書物を読むことばかりが……』と言うのを、孔子は強弁だとしたではないか。」(P 56)

もうひとつ、著実な読書をおろそかにした結果、宋儒は往々にして文献の限界をわきまえない議論をする、ということとを批難した発言を引用してみよう。

「儒教の話は文献で明らかにすべきであり、なにかするにも読書をすべきである。仏教とちがって、儒者は書物を読むことを知らないと笑うべきところが多い。例えば、論語に『国を治むるは其れ諸を斯に示すが如きか。其の掌を指す。』とあるが、中庸の『国を治むるは其れ諸を掌に示すが如きか。』は省文である。孔子がその掌を指さなかったなどとはどうして言えようか。また、『子曰く、吾が道は一以って之を貫く。曾子曰く、唯と。』を儒者が子貢を譏って『曾子の唯には及ばない。』と言っているが、記事には詳略があるものだ。子貢が『唯』と言わなかったことなど何で知れよう。思うに、この書物は語氣も消し去ってはいない。曾子だけが『唯』と言って、門人が彼に質問することができたのだ。子貢がもし理解していなければ、質問しないはずなのだ。これは皆、宋儒の欠点だ。」(P 81)

また宋儒が經典を重視しなかったことへの批難の発言としては次のようなものがある。

「六経は聖人の手によって裁成されたものだが、秦の焚書の後、学者達によって伝録されたものであって、譌竄がないはずはない。それでも大体は失われておらず、千年の後にあとからそれを裁定することは、愚でなければ妄だ。安心

できないところがあれば疑いをのこしておけばよいのだ。宋人のいろいろな議論は、六経を信じていないところが多い。……」(P 117)

また、宋儒が実践を問題にしなくなり、空論をもてあそんで現実にくとくなくなったことを痛罵して言う。

「性命を論じたり人倫を叙したりするのは、宋儒でなければ物の怪か。世の中のことにうとくて、政治に実施しても効果がない。朱子は自分でもそう言っている。」(P 24)

以上のことも含めて、馮班は宋儒の四大欠点として次のことをあげている。

「宋儒には四大欠点があつて、それは今でもなおひどいようだ。読書を喜ばないから、君子と小人がだんだん区別がつかなくなつてきたこと。詩文を作らないから、言葉がますますいやしくなつて、しかも自分では気づかないこと。功業を事としないから、世の中に益がないこと。当世のことを取りあげないから世事にうといこと。」(P 30)

それでは、これら「宋儒」「宋人」とは、誰のことを言うのであろうか。「家戒」及び「読古浅説」の中で名があげられているのは、程子、朱子、歐陽修、蘇軾、蘇轍、謝枋得、胡寅、程大昌などである。このうち、程朱については、それぞれ批判しながらも、「程子千古之儒宗」(P 58)、「(朱子)是天下第一等人」(P 64)と、その学識を評価しているのである。学問の分野で馮班が最も反発を示したのは、明言はしていないが、陸学の徒である。「聖人好読書、豪傑好読書、文人亦好読書、惟宋儒不好読書」という条に何焯が次のような評を加えている。

「程朱の学を為すや、必ず読書に由りて義理を講明す。惟陸学のみ読書を尚ばず。」(P 26)

歐陽修については、古文作家でありながら、当世風の文を作ったこと(P 48)、史家として公平でなかったこと(P 143)などをあげながらも、「馮道伝」における平静な文章を評価したりしている。(P 143)

蘇軾についても、「嘻笑怒罵」、即ち大げさな表現があることを嫌っているが（P 124）、反面、「此公真才兼千古」（P 144）の評価もある。ただ、蘇轍に関しては、古代を論ずるのに資料を正しく用いてないとして、厳しい評価が与えられている。

「蘇子由の蜀先王を論じたものに、『蜀に抛るは地に非ざるなり。孔明を用いるは將に非ざるなり。』と言っているが、昭烈の生平を調べてみると、孔明を將として用いたこともないし、蜀に抛らなければ足を措くべき土地もないことがわかる。この論は三国史を読んでいないのだ。宋人の議論は大体こんなものだから真似してはいかん。」（P 17）〈同旨の文章がP 148にもある〉

謝枋得については次のような発言がある。

「謝疊山の文章規範は最もよくない。彼は専ら古人を誣毀して英氣ありとしているが、これなど極めてひどいことだ。」（P 66）

また、胡寅については次のような発言がある。

「致堂胡氏は読史管見を作ったが、その人を論ずること、酷吏の獄のようなものだ。」（P 18）〈読史管見についてはP 118にも同旨の批判がある。〉

程大昌については次の発言がある。

「程大昌の『演繁露』は妄議紛紛である。」（P 134）

これらの発言を見ると、馮班が、妄説と誇張を嫌っていたことがわかるが、それはそのまま擬古派や竟陵派への反発となるものであろう。彼等に対する批判は次に「正俗」のところで述べるとして、以上のことに、二三のことをつ

け加えよう。

まず、經典の重視ということに関連して、經典に見える言葉を自己の理論の根本に置くということ。「正心誠意」「至徳要道」「信而好古」「溫柔敦厚」「詩言志」などがそれである。

次に宋人への反発と関連して、その対蹠点に位置する漢儒に接近すること。

「漢儒の經典解釈は、必ずしも全部正しいというわけではないが、大事を断じ、大疑を決するには、基準とすることが出来る。」(P 29)

という発言がそれである。

そして、学問の実践ということについては、単に儒者が空論をもてあそぶことを嫌っただけでなく、儒者の軽卒な行動が、自分一人でなく、他の者や国家全体に災を及ぼすことを深くいましめていたということを指摘しておかねばならない。これは、明末清初の困乱期にあって、後に「弑臣」として批判された錢謙益の行動が影響していると思われる。いま、そうした錢謙益を弁護するかのとき発言と、その反対に、明初、燕王にしたがわず、一族数百人の命をまきぞえにした朱子学者、方孝孺を批難する発言とをあげよう。

『既にして明且つ哲、以って其の身を保つ』これは賢臣である。『戦戦兢兢として、深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如し』これは孝子である。国事を債り、家族を滅ぼし、死をもって名を求むる者は賊儒である。乱臣逆子の最たる者である。」(P 18)

「曹操が陳宮を殺そうとして言った。『公台よ、君の母親をどうするか?』。陳宮は答えた。『母はあなたにある。私にはない』。しなやかでいてしっかりしている。それで母親は無事だったのだ。方孝孺は死ぬ時に『必ずや十族無け

ん。」と言った。これは陳營には及ばない。」(P 20)

以上、馮班が学問というものをどのように考えていたか見てきたのであるが、次に、馮班自身の学問において、それがどのように活用されていたか見てみよう。

卷三「正俗」は、馮武の序によれば、女弟子の董双成から得たものである。全部で三十一条から成り、まとまった著述ではないが、馮武の編集によって全体の構成にある程度の秩序が見える。すなわち、第一条から第三条までは、主として古代の佚詩について、第四条と第五条は楽府と詩について、第六条から第十八条は、六朝から唐に至るまでの詩体と韻律について、第十九条から第二十三条は韻書について、第二十四条から第三十一条は、詩と学問読書について、である。

これらの記述の中から、まず、「博学、審問、慎思、明弁」という態度で文献に対し、宋人及び俗学の徒の妄説を訂正している例をあげてみよう。

「南北朝では、有韻のものを文とし、無韻のものを筆とした。唐末に至って、すべて文章を文と言って、詩と対としたのである。今の人は昔、筆と称したものが何物であるかを知らないのだ。」(P 89)

「文苑英華も歌行と楽府と二つに分けているが、歌行の名称がいつから始ったかはわからない。魏晋の頃に奏された楽府、例えば、艶歌行、長歌行、短歌行などは、大体漢代の歌謡である。これを行と言うのは、どういう意味だかわからない。宋人が、体が行書のようなだから、と言うのは、開いた口がふさがらない。」(P 92)

「楽人が奏したものを楽と言ひ、詩人が造ったものを詩と言ひ。詩はすなわち楽の詞なのだ。もともと一定の体はな

い。唐人の律詩もまた楽府なのだ。今の人はわからないものだから、往々詩と楽府のちがいを求める。鍾伯敬などは、『某詩は楽府に似たり、某楽府は詩に似たり。』などと言う。(P 92)

「詩家は常に、聯有り絶有り、と言う。二句が一聯、四句が一絶。宋の孝武帝が『吳邁遠は聯絶の外は解するところがない。』と言ってゐるのがこれである。古人にはこうした語が多い。四句の詩を、だから絶句と言うのである。宋人は知らないものだから、律詩の首尾を絶つたものだと言う。目に一丁字無き輩がみだりに詩話を作つて後学を誤またしたことは恨むべきの極みである。かくの如き議論も一つや二つではない。」(P 95)

この他にも、青木正児博士が指摘しているように、詩体に関する論及がいくつかあるが、総じて幅広く文献にあたって通説に相対しているのである。

次に、經典の尊重ということについて言えば、彼は詩の遺佚について詩経にもとづいて解決しようとする。

「(佚詩について) この頃の詩選は必ず上古から始めるが、時代ははるか遠く、眞實は混り合い、雅馴ならざるものもあり、また、書伝に引く逸詩も、せいぜい数句で、全篇ではない。詩経三百五編が孔子の刪定したものなのだから、その棄てたものを集めるべきではない。かつて程孟陽と詩について話をした時、私は犬が骨を拾ってくるのに譬えたが、まんざら戲言ではないのだ。鍾伯敬は擬古派を撃つて出て一掃したが、ただこの点においては彼等を矯正することを知らなかった。詩帰は古今詩刪に比べるとはなはだしいのだ。」(P 86)

また、經典中の言葉を自己の理論の根本に置いてゐる例として、次のような発言がある。

「書経に『詩は志を言う』とあり、詩経の序に『変風は情に発す』とある。易林のようなものは、陰陽を論じてゐるだけで、志を言ひ情による文ではない。王世貞は易林を詩と見做そうとしたが、これは詩がわからないのであって、易

林がわからないだけではないのだ。王・李は詩を論ずるのに、詩句ばかりを取りあげてその理を問題としないから、こんな誤りをおかすのだ。」(P 88)

以上、馮班の発言の中から、馮氏の学問の姿勢とその成果とを見てきたのであるが、次に、四庫提要において、それがどう評価されているか見てみたいと思う。

三

四庫全書館が開設されたのが乾隆三十八年(一七七三)であるから、馮班の歿後、およそ百年を経ていることになる。この間、清朝の學術は長足の進歩をとげており、提要の馮氏への評価は、それこそ「高きに居りて下を視るが如き」ものであった。以下、提要における馮氏への発言を引用してみよう。

卷一百二十三 鈍吟雜錄十卷

大抵明季の諸儒、正を守る者は多く迂にして、名を驚る者は多く詐る。明季の詩文、王李鐘譚の余波に沿うて、偽体競出す。故に班の諸書の中に、詆斥し或いは之を傷すること激し。然れども班の学、本源有り。事を論ずるに多く物情に達し、文を論ずるに皆古法を究む。問まま偏駁有りと雖ども、得る所を要する者、多しと為すなり。

卷一百八十一 馮定遠集十一卷

其の説、力めて蔽羽を排し、尤も江西宗派を取らず。持論亦た時に独り到ること有り。……其の中、論詩の説、取るべきこと多し。惟だ日記の論するところの呉棫の韻補の一条、推して与に鬼神に入ると為すは、則ち之を失すること遠

し。

卷一百八十九 詩紀匡謬

舒の駁するところ、是れ其の一を知りて其の二を知らざるなり。……然れども他の扶摘するところ、其の失に中ると多し。考証精核にして、実に惟訥の上に出づ。

卷一百九十一 馮氏校定玉台新詠十卷

舒の此の本、即ち嘉定本に抛りて主と為す。而うして諸本を以って、之に參核す。……諸本に較べて善と為す。今、趙氏翻雕宋本、流伝尚お広し。此の刻、俗刻に勝ると雖も、終に原本に及ぶ能ざるなり。

卷一百九十一 二馮評点才調集十卷

凡そ持するところの論、具に淵源有り。明代公安竟陵諸家の比擬すべきところに非ず。……然れども韋穀の是の集を選するや、其の途頗る寛く、原と、專には晚唐を主とせず。……二馮乃ち国初の風氣、大倉歴城の習を矯め、競って宋詩を尚ぶを以って、遂に借りて以って江西を排斥し、……崑体を尊崇し、一弊を除いて一弊を生ず。

これらを見ると、四庫館臣は馮舒・馮班等の学問を認めながらも、彼等の擬古派竟陵派に対する極端な姿勢には不満を持っているのがわかる。そのことは、馮氏以外の人の提要に見られる馮氏への言及にも伺われる。

卷一百五十 長江集十卷

集中劍客一首、明代選本は末二句、皆、今日把示君・誰有不平事に作る。惟だ旧本才調集のみ、誰有を誰為に作る。馮舒兄弟は嘗って之を論じ、有字を以って後人の妄改と為す。今、此の集、正に誰為に作る。然らば則ち猶お旧本の未だ改めざる者なり。

これは、馮舒兄弟の説を正しいものとしての引用である。

卷一百八十八 唐音十四卷

馮舒兄弟評章穀才調集、深く様の排律を杜撰せるの非を斥すも、実は則ち排律の名は、亦た此の書に因り、様の創始に非ざるなり。

卷一百八十九 唐詩品彙九十卷拾遺十卷

二馮批点才調集、堆砌板滯、雜亂無章の病を以って、咎を排の一字に帰し、様を詆って俑を作せりと為す。然れども詩家隸事を善くせずんば、即ち二韻四韻も、未だ嘗って堆砌板滯、雜亂無章ならざるなし。是れ亦た必ずしも尽く排字を以って誤とせざるなり。

これらは、ことさらに馮舒兄弟の誤りをあげて、彼等の擬古派をせめるに急なあまりの急み足を指摘しているのである。

以上、提要における馮氏の評価を見てきたのであるが、最後に、清朝初期の學術の流れの中で、馮氏一家をどのような存在として拐えるべきか触れてみたい。

吉川幸次郎博士は、「錢謙益と清朝『經学』」の中で、錢謙益の發言のうち、後來の清儒の態度と揆を一にし、これを先取すると認められるものとして、次の点を指摘されている。

(一) 彼は自己の仕事を『集部』に終始させつつも、『經学』を諸学の基本として尊重する。

(二) そうして『經学』の方法としては、宋學の思弁性をはげしく排斥する。またその延長として、明の儒學の恣意性

を、『俗学』の名のもとに一そうはげしく排斥する。

(三) その対蹠点として、唐以前の字句に即した解釈、ことに漢儒の注釈を、古今に卓越したものととして、尊重する。

(四) そうして自己の文学理論をも、根拠を儒家の古典の語に求めようとする。黄宗羲の表現に従えば、『六経の語を用いる。』

さいごの四をのぞき、その発言は、後来の清儒と揆を一にする。後来の儒儒の態度は、顧炎武よりも黄宗羲よりも先輩である彼の中に、すでに孕まれていたとしなければならぬ。なるほど実践は伴っていない。しかし『経』に対する態度は合致する。』

ここに述べられた四つの指摘は、そのまま馮班が述べていた学問の姿勢にあてはまる。すなわち、馮班は錢謙益の弟子として、その学問的態度を受け継いでいるのである。鈍吟雜録や一馮先生評閲才調集が人々に読まれたということは、錢謙益の学問的態度が次代以後に伝えられていくことに、少なからぬ役割を果たしたと思う。

だがしかし、馮氏にとって、すべてが錢謙益からの一方的な影響であるとは言えない。

錢謙益の大きな影響力の中で、なお独自性を主張しようとする意識が、「馮氏一家之学」であり、それは錢謙益と共通する部分ではぐくまれていったものであろう。

注

(一) 吉川幸次郎「錢謙益と清朝『経学』」吉川幸次郎全集十六卷P.62。

(二) 勝朝殉節諸臣録卷十に、贛州が破れた際、節に死んだ唐王殉節士民七十五人の中に馮復京の名が見えるが、小腆紀年によれば、それは順治三年とあるので、或いは同姓同名の別人かと思われる。

(三) 四庫提要卷十六に、六家詩名物疏五十四卷明馮應京撰とある。いま諸書目を調べてみると、邵亭知見伝本書目、八千卷樓書目に五十四卷馮應京撰とするほか、千頃堂書目、善本書室藏書志、經義考目錄校記、稽瑞樓書目は五十五卷馮復京撰としている。

(四) 前掲書 P 129

(五) 讀書敏求記考証では順治六七年のこととするが、清詩紀事初編は己丑の年とする。今それに従う。
稽瑞樓書目には「嘉祐集二冊」とある。

(六) 四庫提要卷一百九十一馮氏校定玉台新詠十卷には馮舒所校とする。

(七) 論語八佾の原文は次のとおり。知其說者之於天下也、其如示諸斯乎、指其掌。

(八) 青木正見「清代文学評論史」青木正見全集第一卷 P 405。